
ひと

ふあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひと

【Nコード】

N9822N

【作者名】

ふあ

【あらすじ】

ぼくが、僕が、私が、幼い頃に知った言葉。「人」として必要なものが欠けている僕を、長い間、私を縛り付けてきた言葉。「人は、一人では生きられないのだから。助け合わなければならぬ」私は、それは「愛」なのだと解釈した。だが、あなたは思う？ 「ひと」であるあなたに、教えてほしい。あなたは、誰と助け合い、誰に支えられて、どうして、生きているのですか。

前編

はつきりとは覚えていないが、私は昔、こんな言葉を本で読んだのか、誰かに聞かされたのだから、知ったのだと思う。

人は、一人では生きられないのだから。助け合わなければならない。

ぼくはいみがよく分からなかったから、やさしいお母さんにきいた。

ほかのくには、戦争とかでごはんを食べられなかったり、お家をうばわれたりする人がいるんだって、お母さんは、ぼくの口のはしについていたクッキーのかけらを手ではらって、にっこりして、おしえてくれた。ぼくは、どうしたらいいのかたずねた。お母さんは、ちよつと考えて、方法をいつてくれた。

ぼくは手にもつてたクッキーを食べおわってから、ちよきんばこをひっくりかえた。

ちゃ色や、ぎん色のおかねをりようてであつめた。

でも、ぼくがぼきんをしても、なんにも変わらなかった。

小学校のどうとくの時間に、先生もたすけ合わないといけないっていった。

小学校は、ともだちがたくさんいて、楽しかった。クラスに、いつもおにいちちゃんのお古のふくとランドセルをもってきて、きゅうしよくをいっぱい食べて、お母さんがいない子がい

た。ぼくは休み時間、おんがくしつに行くところであつた。わすれものを出して教室にもどったら、その子がほかの子のつくえにあったエンピツを自分のふでばこに入れてるのを見た。その子と目が合った。

次の日に、先生がその子をよくいんしつによび出して、ぼくもいっしょに、よび出された。

どうして、先生に言わなかったのっておこられた。でも、たすけ合わないといけないから、エンピツをいっぱいもってる子のを一つぐらいあげてもいいんじゃないかなあって、ぼくは思った。だけど、そう言ったら、先生はすぐおこった。その子はずっと、下をむいてた。

中学に上がったって、ほぼ小学校の持ち上がりになつたから、僕は友達作りにはあまり困らなかつた。

二年生の時に転入生が来て、僕たちはいろいろと彼に話しかけたが、彼は内気な性格のようで、いきなり話しかけると、こっちが驚くほどびくついて、どもりながら何とか返事をしてた。

数ヶ月すると、彼の机に落書きする人が出てきた。数日後には、上履きが廊下のゴミ箱の中から見つかった。そんないじめは、段々とエスカレートしていき、彼がついだ給食を食べたくないと言う女子が現れ、わざと足をひっかけて転ばせる男子も出てきた。

僕はあの言葉を思い出して、よく彼に話しかけ、一緒に教室移動

をした。

始めはみんな、僕の行動に驚いていたみたいだけど、ひと月もすれば、彼にされていたいじめは、いつの間にか僕の方に向いていた。それに気づいた僕は、彼の方を振り返った。

彼は気まずそうに目を逸らした。僕の机には、見慣れた彼の筆跡で、酷い言葉が書いてあった。

高校生になり、僕はある進学校に通い、バスケットに入り、それにただ熱中した。

その頃、僕は一つ下の女の子に、好きだと言われた。何で、と聞くと顔を赤らめ、僕がボールを追いかけて、相手をかいくぐってシュートをする所がかっこいいと、蚊の鳴くような小さな声で言った。好きになってくれますか、と聞いた彼女の目は潤んでいたけど、僕は反対に聞き返した。

僕は、きみを支えるように努力するけど、きみは、僕を支えてくれる？

彼女はぽかんとした顔で、どういう意味ですかと聞いた。僕は、そのままだと答えた。

その女の子は、もじもじしながら、先輩は部活の方も、みんな支えてるじゃないですか、と笑顔で言った。僕はバスケットを始めて一年と少しだったが、選抜入りが決まっていたし、次期主将の候補にも入っていた。

うん。僕は、みんなを支えたいって思ってるよ。

すると女の子は、再び、意味が分からない、といった顔をし、不

安げに上目遣いで見上げてきた。よく表情が変わる子だなあと、僕は感心した。

先輩には……。あの……。特別、っていうのは、ないんですか……？

彼女の相変わらず小さな声に、僕は笑った。だって僕は、ただ一人の為に、生まれてきたわけじゃないんだし。

すると女の子は、見る間に涙を瞳に浮かべ、ぼろぼろと零しだした。僕はびっくりして、どうして泣くのか聞こうとしたけれど、彼女はごめんなさい、ごめんなさいと呟きながら、走ってそこから逃げてしまった。それから、僕が卒業するまで、彼女が部活の練習を見に来ることはなかった。

高校を卒業し、僕は可もなく不可もない成績の大学に入学した。実家から少し離れていたため、一人暮らしをするようになった。

僕は物理系の学問を専攻し、時には解くのに何時間かかるような難問に取り組んだりもしたが、その後の達成感を交えると、決して辛くはなく、むしろ楽しさのほうが増していた。

だが、どうしても、何時間、いや、何日考えても答えの出ないものがあった。

何日もかけて、ある日、父が倒れたという電話を受けた数日後に、その「答えのようなもの」をようやく自分で出した。

支え合う、というのは、愛のことではないだろうか。

脳溢血で父は急死し、僕の心は、どこかにぽっかりと穴が開いてしまったような感じがした。その部分はきつと、父が埋めてくれて

いた場所なんだろうと思う。そして、しつけは厳しかったが、本当は誰よりも僕のことを考えてくれていた父の愛が、そこにあったのだと思った。

しかし、その考えはすぐに自分で否定した。それなら、僕は両親が共に亡くなってしまえば、生きられなくなってしまいうのだろうか。支えがなくなるというのはそういうことで、しかし、それで僕まで死に至るとは思えなかった。

世の中には、「愛」を語る人間が多い。だが、愛は本当に、人を生かすのだろうか。命までを、支えるのだろうか。

「愛」を売る者は多かった。特に、夜に街に出てみると、そこは「愛」を押し付け、求め、貪る者たちから発散される何か空気のようなものが溢れ帰っており、僕は吐き気さえ覚えた。

大学の友人に教えられたこともあり、僕は、その「愛」とやらを売り買いすることを覚えた。

だが、そこに、本物の「愛」があるとは到底思えなかった。所詮それはまがいもので、朝日が昇ればたちまち霧散し、結局金と人々の肉体的な欲に変化が現れる、というだけだった。

父が亡くなったこともあり、僕は実家から通える職場を探していたが、その必要はなくなった。

母は、事故で亡くなった。ひき逃げしようとした車に何十メートルも引きずられたせいもあり、その姿は悲惨だった。あの笑顔が、ここから作り出されていたとは到底思えないもので、優しかった母の様子を思い出すと、泣けてきた。

僕の心にはもう一つ、大きな穴が開いた。

だが、僕は死なないうだった。

支え合うことが、本物の愛につながるのだと、僕は再び、根拠もなく確信していた。元来、答えを無理矢理にでも導き出さないと気がすまない性分なのだろう。

だが、両親という支えを失った僕は、こうして生きている僕は、本当に、彼らを愛していたのだろうか。

僕には、人間的な何かが欠けている。人として、大事なものが欠如している。そう思いだした。

僕には、人を愛する意味が分からない。どのような形が愛なのか。どのような感情が愛なのか。好き、の根底にあるものが愛ならば、僕は誰も好きになっただことがない。

人は、一人では生きられないのだから。助け合わなければならぬ。

一人で生きられないのなら、今僕は、誰かと、何かと、助け合っているのだろう。

しかし僕は一体、何を助け、何に助けられ、誰を愛し、誰に愛されているのだろう。

大学をそこその成績で卒業し、更に僕は社交的だと相手にとられる、つまり人に紛れて生活するためだけの仮面を持っていたから、就職先は幾つか見つかった。その中の、故郷から最も離れた会社に、僕は、いや、私は入社した。

私が「人間」となる仮面をつけて付き合っていた同期の仲間の人々が、私にある人を紹介してくれた。その時初めて、私は、人を好きになる、という気持ちを自らの脳で理解したのだと思う。

私は、彼女を愛していた。と思う。

彼女も私を愛していた。と思う。

少なくとも、私は自分の持てる全ての「愛」を彼女に謙譲した。
たとえそれが見せかけのものであっても、それが、私の持つ全てだった。

後編

やがて、私は父親になった。

初めて我が子を目にしたとき、これ以上愛せるものが他にあるだろうかと思ひ、別の意味で、ほっとした。きっと、これが愛なのだ。俗に言う、親子愛というものなのだ。

息子の大きな瞳は、私たちと同じ二重で、顔の形は私に似ており、彼女に似た茶色がかった柔らかい髪をしていた。可愛らしかった。動作の一つ一つに、言葉に出来ない愛おしさを感じた。彼は、私と彼女を支えにして生きていく、そうだ、これが答えだったのだと、すっかり私は思ってしまった。

「愛」だと思っていたそれは、やはり言葉にできないもので、世間は正しかったのだなあと思った。

息子が五回目の夏を知った時、私と彼女は離れた。

彼女は、何度も私に謝った。ごめんなさい。ごめんなさいと。ふと私は、高校時代に見た、ある女の子が泣いている姿を思い出した。彼女には、私以上に、彼女を支えられる者がいるようだった。

彼も、本当に私のことを愛してくれているの。

彼女は、そう言った。

ああ、そうか。

私は、そう返事をした。

やはり、私に、彼女を愛する資格はなかったのだ。彼女は、私が

いなくても生きられる。彼女には、私という支えは必要ないのだ。そして、息子も。

親権は、やはり母親に与えられた。彼女の愛する者は、彼女と息子を養う稼ぎをも得ている。私に、手の出しようがあるだろうか。愛することで人を支える機能が、欠如している私に。

だが、息子だけは、こちらにいてほしかった。

しかし、彼もまた、私がいなくても生きられるようだった。私が息子に抱いている感情が、本当の「愛」であると思っていたが、それなら、彼は死ななくてはならない。しかし、彼は生きている。

私は、誰の支えにもなれない。

あなたは、優しすぎるのよ。

彼女は、涙ぐんで言った。

優しい人間が、人を「愛」することの出来ない、人を支えることの出来ない人間ではないだろう。滑稽な話だと思えたが、私はいつものように微笑んだまま、その言葉を受け取った。

人は、一人では生きられないのだから。助け合わなければならぬ。

それなら一体、私は誰に助けられているのだ。誰を助けているのだ。何故、生きているのだ。

私は、何もする気になれなかった。何も、食べる気になれなかった。外に出るのは億劫だった。人に接するとき肌身離さず持ち歩いていた仮面は、知らない内に、どこかへと、忘れてきてしまった。

だから、仮面をもたずに、外へ出た。暗い夜、私は身体を突き抜ける強い光に包まれた。

私は、眠ることにした。深く、深く眠ることにした。眠り続けることが、私に許される、唯一の行動だと思えた。

ああ、私には、何もない。

人を愛することも、愛されることもない。支えることも、支えられることもない。

何故、みんな生きていられるのだろう。

この答えを知っているからなのだろうか。子どもの頃からすでに、悩み苦しんで答えを導き出し、一人で生きられない、助け合える生き方を、学んでいたのだろうか。

私には、何も分からない。

不意に、悲しくなった。それは、父や母が亡くなった時とは異なるもので、心のどこから滲み出す、わけの分からない涙だった。言葉に出来ない、悲しみだった。書いて表すことも、口で他人に教えることも困難な、ただ、胸の奥が見えない誰かに締め付けられているような、悲しみだった。

私に与えられるものは、所詮、こんなものばかりなのだ。

今までが馬鹿馬鹿しく。今までの全てが、滑稽な道化話のように思え、私は心の中で涙を流し、静かに笑った。

私の命は、この世に繋がっていること自体が奇跡だと、医師は言った。おぼつかない足取りで車道へはみ出した私は、夜の道路で、大型トラックにはねられた。何時間にも渡る手術が行われた。

だが、命を取り留めても、この身体は一生動かないものになるかもしれない。

その運命を知った時、私は途方もない絶望感を覚えた。

ある日、私の両目は、薄い光を受けた。翌日、翌々日と日がたつにつれて、少しずつ、それは鮮明になっていった。

腕は上がらないが、指先はなんとか動かせた。皮膚への感触も受容できる。

私は、生きていいのだろうか。

私よりも、もっと生きなければならない人が、大勢いるのではないのか。

人を愛することを知り、誰かを支え、支えられる人が。

その者に命を与えたいと願ったが、そう願うと、私は再び、悲しくなった。

だが、その悲しみは、日ごとに、少しずつ、少しずつ薄れていった。

この世にとどまった命が、再び鳥のさえずりを耳にしたとき。日の光を浴びる緑の葉を目にしたとき。少し冷たい風が、皮膚に触れたとき。注射針の刺さる痛みを肌を感じたとき。

鳥のさえずりが、緑の葉が、冷たい風が、細かな痛みが。様々な感覚が、私の悲しみを奪っていく。

私の、命を支えている。

そうか。

やっと、分かった。こんなに身近に、あったのだ。私を支えてくれるものたちは。

そして、私にもう一度、生きる助けを与えてくれる者がいた。

「ぱぱ！」

白い部屋に、幼い声がこだまする。

いたいの？ だいじょうぶ？ あのね、ぼくね、らんどせる買ってもらったんだよ。黒いらんどせる。でもぼくね、ぱぱに見てもらうまで、しまってるんだよ。ママがね、ぱぱが見たがってるかもって言ってたから、まだ一回もつかってないんだよ。よごれないようにね、はこに入れて、ずっとしまってるの。ぼく、しょうがつこう行ったら、サッカーするんだよ。前みたいにね、ぱぱとサッカーするとき、もっと上手にやりたいもん。だから、はやく、げんきになっ
ってね。

舌足らずの口調が楽しそうに跳ね、その暖かく小さな手の平が、私の手を握る。

……ぱぱ、どうしたの。からだ、いたいの？

少し悲しそうな声と共に、私の頬に、私自らが流した雫が伝う感触がする。

私は微笑み、ゆっくり首を横に振った。誰かに接するために使う仮面など、最早どこにもない。

私は、生きていてもいいのだ。いや、生きなければいけないのだ。両親のためにも、あの懐かしい子たちのためにも、私に告白をしてくれた子のためにも、見せ掛けの「愛」を与えてくれた人たちに

も、そしてなにより、私の血と自分の血を半分づつ分け合った彼女と、この子のためにも。

彼らは、私を助けてくれていた。
そして、私も彼らを助けていた。

ああ、これが、愛するということなのだ。愛おしいと思うことなのだ。

ようやく私は、答えを見つけた。長かった。だが、その長さ以上に大切なものを、私は手に入れた。

涙は流れるが、今の涙はもう、悲しみのそれではなかった。

後編（後書き）

活動報告に、後書きっぽいものを載せます。
この話は、これで終わりです。
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9822n/>

ひと

2010年10月11日02時29分発行